国慶節を挟む大型連休を利用して、大連駅より新幹線に乗って瀋陽市へ二泊三日の旅にでました。

治安の悪い中国では、駅の構内に入るには手荷物のＸ線検査を受けます。新幹線で大連ー瀋陽間は「東京－名古屋」間に相当し、時速 300km 少々で約２時間で着きました。

■ 新幹線網

中国ではここ 10 年の間に、日本と同じ型の新幹線網が発達しています。

５、６年前に江西省の南昌市にいたころから、私も新幹線に乗りました。ただし、南昌から上海に行く新幹線は在来線の上を走っていました。中国の鉄道の軌道幅は日本（狭軌）と違ってもともと広軌なので、それが可能でした。しかし、その後、中国各地の新幹線は、それ専用の鉄道を敷設しています。タイトルにあるように中国東北部の新幹線（大連ー瀋陽ー長春ーハルビン間）はすべて新幹線専用の鉄道になっているようです。

今回の旅行は留学生仲間の得永さん･渡辺さんとご一緒でした。得永さんの知り合いで瀋陽に在住の王さんが駅で迎えてくれました。瀋陽駅の近くにある「維也納（ウィエナ 四つ星）ホテルで旅装を解きました。ホテルのエンタランスの壁や廊下などに、音楽家や貴族団欒の絵が飾られており、このホテル名がオーストリアのウィーン（Wienna【独語】）に由来していることが分かります。

瀋陽駅舎（満鉄時代に東京駅を模したレンガ造りの名残か？）

ホテルで訪問先の作戦会議をする
左より渡辺さん・得永さん・王さん

■ 瀋陽市の概況

右図にあるように瀋陽市（人口 825 万人）は、９つの市区（市人口の約 70%を占める）と４つの周辺部から成っています。「県」とは市の下部組織で、日本では「町」に相当します。とはいえ、各県の人口は 35ー69 万人もいるのですから、日本でいえば「市」と呼んでもいいほどの大きな行政組織です。そして、面白いことに、県の一つは「市」になっています（新民市；県級市と呼ばれる）。大連市でもその中に３つも県級市があります。「市(地級市）の中にまた小さな市（県級市）がある」ーーこれが中国の行政組織の特色です。

中国の行政組織では、日本の都道府県に相当する「省」が基本単位です

が、「北京市」「天津市」「上海市」「重慶市」の４つだけは「直轄市」と呼ばれ、省と同格の特別扱いがされています。そして省の中に、遼寧省なら大連市や瀋陽市のような一般の市(地級市）があります。瀋陽市は中国東北部（旧満州）で最大で、人口が 825 万人もいる工業の発達している巨大都市です。

瀋陽市は将来、近隣の工業都市「撫順市」（石炭の露天掘りで有名）、「鉄嶺市」と合併して、北京市並みの「直轄市」になる計画があるそうです（それが実現すると、遼寧省の省都は大連市となる）。中国では歴史上、漢民族の支配する地域は「万里の長城」以南とする考え方が支配的でした。清王朝の支配民族（大昔には「韃靼人？」・古くは「女真族」・現代は「満州族」と呼ばれる）の出自は中国東北部ですから、元々は中華文明の及ばぬ異郷「蛮族の住むところ」と見做されていたしょう。しかし、現代ではこの地でも、漢民族が大多数住んでいるし、満州族や朝鮮族、蒙古族などの少数民族も中国の人民であるとの意識を持っています。だから、東北部の代表的な都市である瀋陽市など三都市が合併して、北京や上海並みの扱いをされるということは、この地に住む人々にとっては中国人としての誇りとなるのではないか、と私は想像しています。

さて、瀋陽市の名の由来にもふれておきましょう。

清朝時代から日本が支配していたころまで「奉天」と呼ばれていました。司馬遼太郎の「坂の上の雲」（それを映像化したＮＨＫのドラマ）では、日露の陸軍の最後の大会戦が奉天近くでありました。戦場は小さな村が散見される程度の無限の荒野に見えましたが、百年後の今日では 825 万人が住む大都市に変貌しています。現代名「瀋陽」は、「瀋水ノ陽」の意で、市内の南部を流れる渾河の古名「瀋水」の北に位置することに由来しています（ウイキペディア「瀋陽」より）。

ここで、中国における山と河における「陽と陰」の呼び方を整理しておきます。

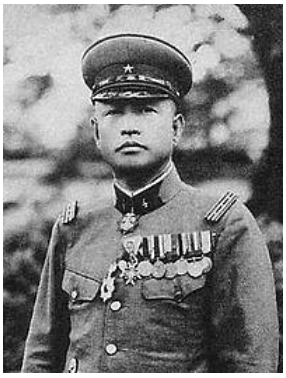
風水思想においては、山・丘・阜などの南側、河・江・川・湖などの水辺の北側を「陽」と言う。

分かり易く図示すると、こうなります。山を例にすると、太陽に照らされる南斜面側を「山陽」、反対側を「山陰」と呼ばれ、日本における中国地方の呼び名からも容易に理解できます。

一方、河では、「陽と陰」が逆になります。だから、渾河の古名「瀋水」の北に位置するので、「瀋陽」と名付けられました。同様に「咸陽市」（秦の始皇帝の都として栄えた旧名「渭城」）と「洛陽市」は、それぞれ渭水と洛水の北側にあるので「咸陽」と「洛陽」と呼ばれています（なお「咸」は「皆」という意）。

■9.18 歴史記念館（「満州事変」の記念館）

一日目午後から、さっそくまずお目当ての記念館へ王さんの案内で行きました。ここは、地下鉄の路線から外れているので、タクシーを飛ばしました。



中国では満州事変を「9.18 事変」と呼んでいます。次頁にあるように、記念館前に巨大なモニュメントがあり、満州事変勃発の日 1931 年９月 18 日が刻まれています（学童の愛国教育の場として使われている）。

この事変の首謀者・石原莞爾（右の写真）は、板垣征四郎とともに柳条湖で謀略により鉄道爆破事件を引き起こし、それを口実として軍隊を動かし、またたくまに瀋陽をはじめ満州を支配下におきました。そして、翌年には傀儡国家「満州国」を成立させて、満州における利権を確保した。こう見ると彼は、帝国陸軍において最も過激な

終戦後、瀋陽市内の神社や寺は廃されて、石碑だけが残っている

侵略者のようですが、これ以上の中国への野心を抱かず、昭和 12 年勃発の盧溝橋事件からはじまる中国侵略には反対の立場をとったといいます。また、2.26 事件のとき参謀本部作戦課長だった石原は、青年将校の暴発を反乱軍と断じて鎮圧の指揮をとるなど、リベラルな一面もありました。

9.18 記念館ではこのような石原の多面的な思想行動には一切斟酌することなく、満州事変を企んだ首謀者であり、中国人民にたいする許しがたい侵略者であると紹介されています。彼の写真は板垣征四郎とともに記念館に掲示されていた。なお、石原は東條英機と激しく対立して太平洋戦争前に予備役に追いやられ、病気のため、「東京裁判」で戦犯指定を免れました（ウイキペディア「石原莞爾」より）。彼は一面では論理を構築する戦略家ですが、感情が先走る発言態度、行動に及んではファナティックな面があるという特異なキャラクターの人物のようです。

記念館の陳列は前半には石原たちの侵略行為を詳細に述べながら、後半では中国人民が日本の侵略を跳ね返し、その抗日運動の中心に毛沢東率いる共産党軍が指導的役割を果たしたという、この種の記念館のお決まりの宣伝が述べられています。事情はどうあれ、卑劣な謀略によって他国を侵略したことがいいはずはなく、中国人の怒りの気持ちは率直に受け止めなければならないと思いながら見学していましたが、後半になるころには興ざめした気分にもなりました。

なお、事件現場である柳条湖はこの記念館の裏側にあることを後で知ったので、行けませんでした。

■ 夕食は朝鮮人街の焼肉（王さんお勧めの店で）

■ 二日目の朝食

ホテルの近くにある包子店で朝食を摂った。ここは習近平主席が立ち寄ってから人気が出たとのことで、王さんお勧めの店です。お粥、包子、浅漬けなどが注文でき、小ざっぱりした雰囲気の中で朝食向きの店でした。

店名の旧字体(上)と簡体字(下)を比べください。7 時前だったので空いていたが、三十分もすると客が増えた。

■ 張氏帥府博物館

瀋陽市には大連と同様に、東西と南北に交差する二本の地下鉄があります。瀋陽駅前駅から地下鉄に乗って、５つ目の「中街駅」で降りると、そこは「故宮」を中心に瀋陽で最も古く開発された場所です。

我々はまず午前中、張氏帥府博物館を訪ねました。

ここは、奉天軍閥として名をはせた張作霖・張学良親子の官邸兼私邸で、日本の大名の館に匹敵する立派な屋敷でした。

博物館正面に軍服姿の張学良の像が立っている。

張親子は日本軍にとっては好ましからざる存在でした。父作霖は、扱いに手を焼いた日本軍の鉄道爆破によって殺害され、息子学良は、「西安事件」で蒋介石を軟禁し、第二次国共合作を実現させた。これによって、蒋介石国民党軍と毛沢東赤軍は、敵対関係をやめ（いちじ棚上げして）、一致協力して抗日の戦いを行うことになりました。

部屋がたくさんあって帰った今、記憶が定かではない。執務室の床下にはオンドル暖房があった。それはそうでしょう、瀋陽の冬はマイナス 30 度にも下がるから。

軍閥の棟梁「張学良」が立派な銅像で屹立しているのは、彼の「国共合作」による共産党軍にへの協力が評価されているからでしょう。彼の息子二人も共産党に協力したから評価が高いが、オヤジの張作霖が軽視されているのがいかにも共産国中国らしい。

■ 瀋陽金融博物館

張氏帥府博物館の隣に瀋陽金融博物館があります。ここは、張父子が設立した銀行の博物館で、実際にその銀行があった場所に建てたとのことです。

――現在中国にある同類の博物館の中で、規模がもっとも大きく、展示内容も一番豊富で、蝋人形が本物の人間と見間違えるほどのリアルにで展示されており、当時の中国の銀行の様子が楽しめる博物館である。

と宣伝文句にありました。

どれが蝋人形でどれが実物かはご覧になったらすぐにお判りでしょう。興味深いのは、辛亥革命以後のこの時代には、もう清朝時代特有の弁髪の人がいないことです。西洋服スタイルの人もちらほら・・・

博物館の展示には世界各国の紙幣・貨幣の展示、金融の歴史、はては人民元（100 元）の偽札の紹介までありました。

右の写真は「金運の神様」で、紙幣が神様の足元に散らばっていた。これを盗めば、いくらの額になるだろうか？　どうせ１元札だろうから、大した額にはなりません。

青龍偃月刀（せいりゅうえんげつとう）らしい刀を持ったこの神様は「関羽」でしょう。なぜ三国志の豪傑・関羽が金儲けの神様になったのか？　関羽の故郷山西省の商人が、関羽の武勇より＜義にあつく、人を裏切らない＞というイメージを商売に利用しようとしたのがはじまりだといわれています。それに加えて、中国各地にある関林（関羽）廟に門前町ができ、そこの商人が関羽を商売繁盛の象徴として金儲けの神様に仕立て上げたこともあるのでしょう。関林廟は日本のチャイナタウンにもあります。

張氏帥府博物館からここまで、歩き疲れました。得永さんは携帯電話の「万歩計」を眺めて、「今日はここまで 7,500 歩あるいた。目標は一日一万歩です」と、旅行中もしきりに言って、歩数を健康のバロメーターにしています。私は、週に一回テニスをしているので、歩くことには興味なし、とにかく疲れたし腹が減った。

■昼食

肉料理など、四品に舌鼓を打ちました。

本日は中秋節で、王さんは一家団欒のために食事後、帰宅。この二日間、観光案内でお世話になりました。

■ 故宮博物院（二日目午後）

故宮といえば、北京市の故宮と台湾台北市の故宮のほかに、今回訪れた「瀋陽の故宮」があります。清王朝の支配民族である女真族（満州族）は初代と二代の皇帝がここ瀋陽の故宮で政務をおこなっていたが、清の首都が北京に遷都した後には、離宮として使用されることになりました。

（左）外側に建つ文徳坊
（右上）入場券売り場で 4 番窓口は、無料（免費）の入場券を支給するところ
（右下）故宮博物院入り口

入場券（中国では「門票（メンピャオ）」という）は年齢によって値段が違います。故宮博物院では、得永さんと渡辺さんのような 60 歳以上者は半額の 30 元（約 600 円）、そして、私のような 70 歳以上者なら無料です。ここだけでなく、午前中訪問した「張氏帥府記念館」、明日行く「昭陵」も同様です。だから、我々は切符売り場でパスポートを提示して年齢を証明します。ただし、ところによっては、外国人は優遇措置の対象外になることもあるし、留学生証を提示すれば学生並みの割引（半額？）になるところもあります。

なお、私が中国に来た 10 年前なら、入場料 60 元は日中の物価差を勘案したら、実質日本の五千円以上に相当する高額でしたが、現在ではインフレと賃金上昇によりさほど高価ではなくなったように思えます。それだけ中国が豊かになっているのでしょう。

大政殿は「八角形のユニークな形」で、狩猟民族である女真族が住居していた移動式テント・ゲルを真似ているといわれている。満州を制した初代皇帝「ヌルハチ」は国名を「金」とし（すでにあった金に対して歴史上では「後金」と呼ばれている）、ここで政務を執った。ヌルハチは、後代に「清」を名乗り、北京に遷都して中国全土を支配することになるまで予測できただろうか？

十王亭は左大臣・右大臣である重臣たちの執務室で、大政殿前の広場に左右対となって十室ある。

故宮の中央部は二代皇帝ホンタイジの執務室や後宮のあるところ

大政殿や崇政殿には「一対の竜」が柱に巻き付いています。竜（龍）は古来中国では皇帝のシンボルと考えられている。この架空の動物は何から連想されたものだろうか？　胴体は蛇で、全身を魚のような鱗で覆われており、顔と耳は馬、二本の角は鹿、爪のある４本の足は虎（鷲）、そして髭は魚のナマズ？　少なくとも５種の動物の特色を有しています。竜の多くは水中に棲み、大鵬（おおとり）のように天に飛翔すると、雲を起こして雨を降らすという。中国は恐竜の化石が多数出土することでも知られているが、竜骨は古来薬として珍重されているそうです。

ところで、女真族の衣服について関心があります。二代皇帝の肖像画の衣服は、恐らく彼らの民族衣装チーパオ（旗袍）でしょう。

女性も、詰襟、長袖で、足元まで裾広がりのゆったりとした服装でした。

1930 年代に上海あたりの西洋風モダニズムの風潮によってボディーラインに沿って女性の魅力が際立つように改良されました。これがチャイナドレスというものです。現代では、袖が短く裾が膝小僧の上まで上がり、腕脚が露出するものまで現れています。男性の私はおおいに結構なことだと思いますが、チャイナドレスは機能的ではないので、仕事着には向いていません。

中国近代国家の父といわれる孫文は、「滅満興漢」をスローガンに 1912 年に「辛亥革命」を成功させました。それによって、弁髪など女真族の風習は排除されましたが、チーパオだけは中国人に受け入れられて、チャイナドレスとして生き残っている。今でも、結婚式や式典などで女性はこの服で着飾っています。

■ 夕食

故宮観光が終わり、これから夕食を摂ることになりますが、二日間、美味しくて栄養たっぷりな肉料理を食べたので、我々老人の胃袋には重い鉛を飲み込んだような気分で、食欲がありません。ホテルの近くにある「小籠包」の店に入ったのはいいが、単なる包子でおいしくなかった（一蒸篭五元ではやむを得ません）。

■ 昭陵（北陵）（旅行三日目最後の日）

地下鉄を乗り継いで広大な北陵公園に行きました。その奥に昭陵があります。

昭陵は後金の２代目で清の初代皇帝である太宗ホンタイジ（皇太極）とその妻の孝文端皇后のお墓です。公園はとても広くて、入り口から昭陵まで行きつくのが大変です。幸い、昭陵へいくゴーカートがありました。

五分間程度の乗車で一人五元（約 100 円）です。私はこの旅行で会計を担当しており、三人分の予算を一括して預かり、食事代や入場料などを支払っています。ここ昭陵の入場料も私は無料でした。そこで、運転手に、

「我是七十二岁。免费，免费！」（俺は 72 歳だから、ロハにしてくれ！）

と、厚かましくも掛け合いましたが、運転手は相手にしません。もう一度言おうとしたとき、得永さんが私の袖を引き、

「だめだめ、見てごらん、一緒に乗る人は身体障害者らしいが、ちゃんと金を払っているよ！」

――俺は会計役として、少しでも旅費を節約しようと努力してるのに、はたから口出しせんといて。

と、いいたいところですが、「日本円にして百円硬貨一枚だ」と思って、三人分 15 元を支払いました。

ゴーカートを降りて、少し歩いたところから、お目当ての「昭陵」の聖域に入ります。

●歴史余話

明末に「李自成」の反乱軍が、紫禁城を占拠して皇帝を自殺に追い込み、更に万里の長城の東端にある「山海関」に迫ってきた。山海関を守っていた「呉三桂」将軍は、勢いのある李自成軍と一戦交えるか、軍門に下るかの選択を迫られた。戦えば負けても明王朝への「忠君愛国者」になるし、戦わずに匪賊李自成に屈すれば腰抜けの将軍になる。大いに悩んだ呉三桂はあろうことか、明王朝の宿敵女真族の「清軍」の加勢を頼みとして、山海関の堅固な大門を開いてしまった。無血開城により山海関を通過した清軍は北京を手中に収め、400 年の清王朝をスタートさせることになる。呉三桂は、国家に対する最大の裏切り者として中国史に名をとどめている。

ただし、これは漢民族の歴史であって、「昭陵」に眠る皇帝は別のお考えがあるでしょうから、お尋ねしてみようと思います。

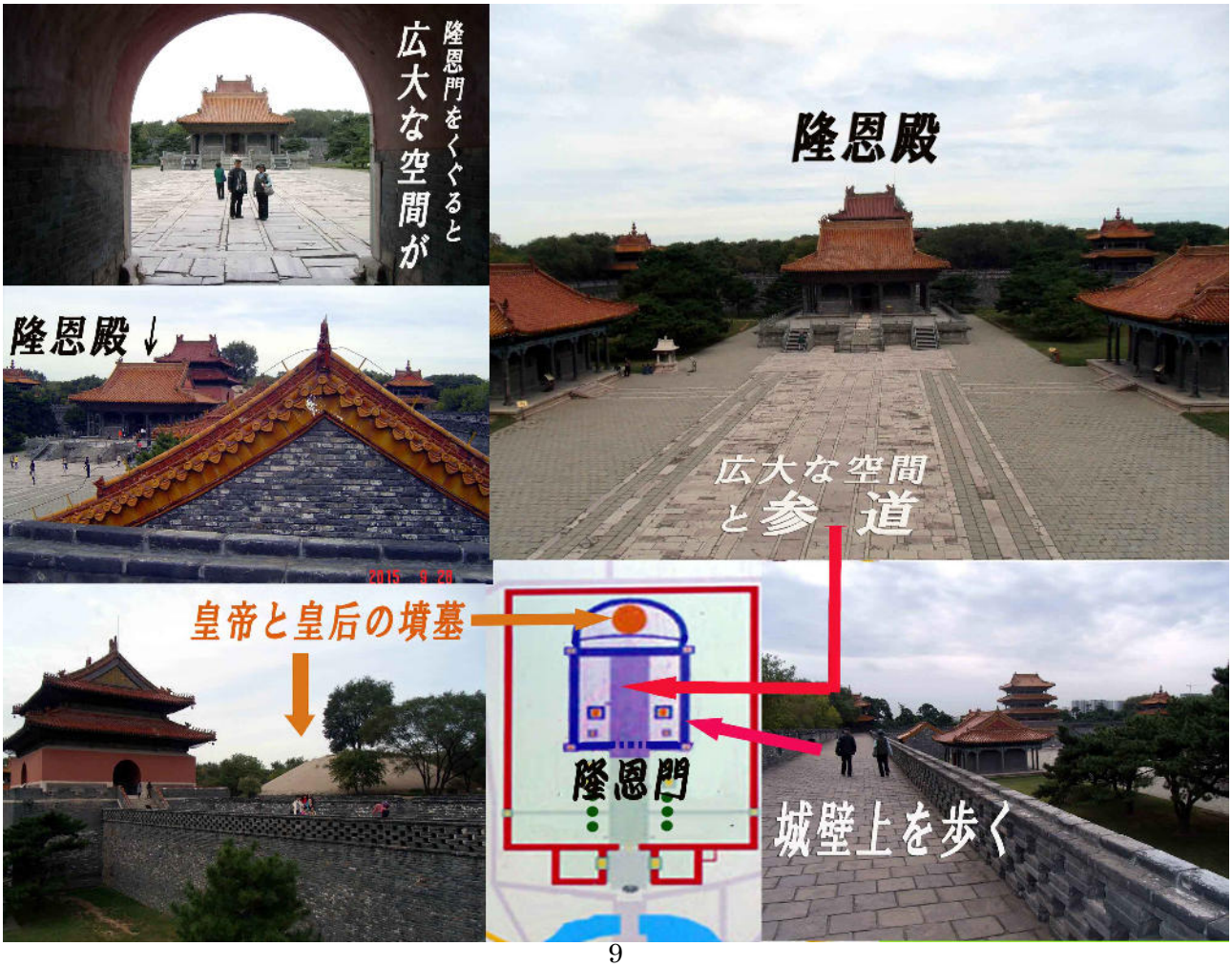
今日は月曜日ですが、ところによってはゴールデンウイークに入っている学校や会社があると思われますが、ここの人出は少なくて、ゆっくり見物できました。

ところで「昭陵」に入る手前の大門の両側に獅子の石像がありました。渡辺さんがいいます。

「獅子の雌雄を区別する方法を知ってる？」

私は、神社・寺にある「阿型」と「吽型」の違いは知っていたが、獅子や狛犬が全部雄だとばかり思っていました。「股間を見たらわかるよ」との彼女のヒントでよくよく観察したら、なるほどペニスの有無で分かることをはじめて知りました。それにしても、女性に教えられるとは面目ない！

そうこうしているうちに、いよいよ隆恩門にいたり、それをくぐると「昭陵」の境内に入ることになりました。



隆恩門には階階があり、そこを登ると方形の城壁の回廊に至ります。高さ７m、道幅５m程度の城壁を一周することにしました。一番奥には二代皇帝ホンタイジと皇后の墳墓がありました。その墓が土饅頭型の素朴な形であることから、私はあることを思いだしました。

これまでに、「三国志」ゆかりの地を訪ねた旅で、二人の重用人物の墓を見たことがあります。蜀の軍師「諸葛孔明」と魏の猛将「張遼」の墓です。

共に盛り土をし、その上に草が生えているだけの質素なものでした。それは、私が日本語教師として赴任した江西省南昌市の郊外にある農民の墓と基本的に同じです。

今回ホンタイジの墓を見て、孔明や張遼と千年以上離れているにも関わらず、その類似性から中国人の生死観に時代を超えた共通性があるのではないか？――と思いまいた。ただし、皇帝の墓ともなれば、もっと立派な装飾を施した墳墓もあるには違いないのですが。

● ヘンな服装写真をご披露（我が Photoshop 技術が冴えわたる逸品？）

中国の歴史的観光地を訪れると必ず貸し衣装屋がある。観光客が古典衣装を着て記念写真に収まるのです。私は衣装をまとった人の写真をちゃっかり撮っておいて、帰宅してから Photoshop で自分の顔を埋め込んで合成写真にするのです（貸衣装代ゼロのせこい手口）。昭陵でも 20 元を払って、満州族衣装で記念写真を撮っていた人がいたので、本人の了解を得て我がデジカメに収めました。そうして我が写真にしたものが、下の中央です。

試みに、得永さんには、皇帝ホンタイジの肖像画から合成写真を作りました（下右）。彼は私より４歳年下なのに、悠揚迫らぬ皇帝にふさわしい貫禄に圧倒されそうです。とすれば次に、渡辺さんの写真も作らねば。

敬愛する彼女のために、腕によりをかけて作ったのが左側の写真です。上海あたりの裕福な社長夫人が、夜会パーティに出席するために、チャイナドレスで若造りした姿です（姑娘（くーにゃん）に負けてたまるか！――と意気軒高で）。

出来栄えには自信がありませんので、その判断は読者にお任せすることにしましょう（チャーミングだと思うが、渡辺さん、不評でも恨みっこなしだよ）。

■旅を終えて

こうして、二泊三日の瀋陽旅行は終わりました。旧名「奉天」こと瀋陽を含む旧満州は日本人にとって良くも悪くも身近でノスタルジックな地域です。そして、満州の地から勃興した女真族の「清」は「元」に次いで中国全土を 400 年にわたって支配する征服王朝でした。その故地が瀋陽にあります。東北地方の地誌・歴史の見聞を広めるいい経験となりました。汽車の切符やホテルの手配をしてくださった得永さんに深謝。　　（了）